

## 中国北部に居住したソグド人の石製葬具浮彫

影山悦子

### はじめに

商業民族として名高いソグド人が、東方に移住し中国内地に聚落を形成していたことは周知のとおりである<sup>1)</sup>。最近になってそのようなソグド人の墓が相次いで発見され注目を集めている。1999年に隋開皇12(592)年に没した虞弘の墓が太原で発掘され、翌年には北周大象元(579)年に没した安伽の墓が西安で発掘され、墓誌銘から二人が北朝の高官であったソグド人であることが判明した。墓室では精緻な浮彫と彩色をほどこした豪華な石製葬具が出土した(図1, 2)。虞弘と安伽の墓で葬具が発見されたのを契機に、以前から知られていた類似の葬具3点が見直されるようになった。また2003年に西安で発見された史君墓から同様の葬具が発見され、翌年には個人蔵の葬具がギメ美術館に展示された。現在では合計7点の石製葬具について中国内外の研究者によって多数の論文が発表され、また当該葬具に関わる問題を議論する学会も開かれている<sup>2)</sup>。

これらの葬具はすべて6世紀後半に製作されたと推定されているが、この頃ソグド人は北朝内部において重要な役割を果たしていた。大統11(545)年に西魏の使者として突厥に派遣された酒泉胡の安諾槃陀は、ソグド人と遊牧民の関係が論じられる際にしばしば言及される(『周書』突厥伝)。東方のソグド人に関する従来の研究の多くは編纂史料に依拠していたが、相次ぐソグド人墓の発見により現在ではソグド人の直<sup>じか</sup>の資料を利用することができるようになった。一連の葬具の図像には多種多様な情報が含まれており、図像を正しく読み解くことで、北朝期に高位にあったソグド人の生活、宗教、文化を明らかにすることができる<sup>3)</sup>と期待される。本稿では、7点の葬具が「発見」された経緯を概観し葬具の形態を示した上で、葬具の図像に関わる最新の研究状況を紹介する。

- 1) 本稿は神戸市外国語大学審査学位論文(博士)の一章を改訂したものである。本稿作成に当たり、森安孝夫先生、吉田豊先生から貴重な助言を賜った。また伊藤敏雄先生は中国語論文を利用して下さった。記して感謝する。
- 2) “Workshop on Sogdian tombs in China”, イェール大学, 2002年4月21日; 「中国の中央アジア人——シルクロード東端の発見」Miho Museum, 2002年11月23日。“Les Sogdiens en Chine 粟特人在中国”, 中国国家図書館, 北京, 2004年4月23-25日では史君墓の発掘報告及び同墓出土ソグド文銘文についての発表(孫福喜・楊軍凱, 吉田豊)と、2004年に公表された個人蔵の葬具についての発表(P. Riboud)があった。



图1 虞弘墓出土石槨（『文物』2001/1）

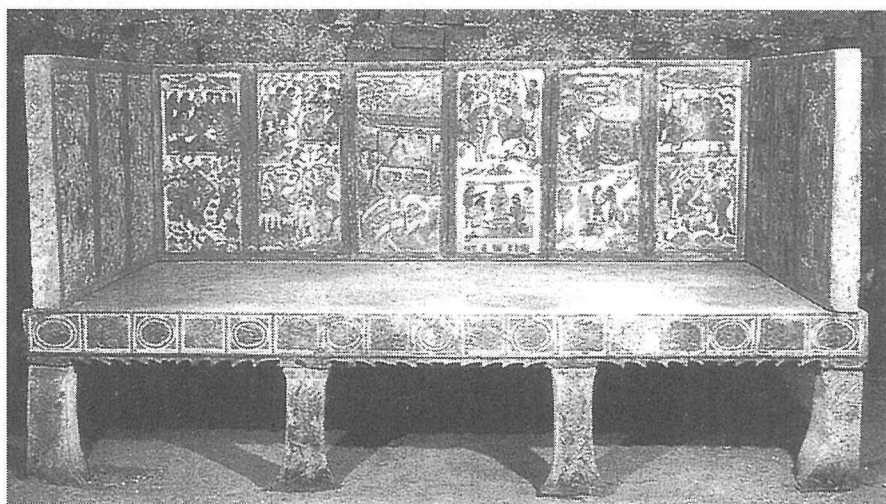


图2 安伽墓出土石棺床围屏（『文物』2001/1）

## I 「発見」の経緯

### 1 虞弘墓・安伽墓の発見以前

1958年G. スカグリアは、安陽出土と伝えられる3枚の石板の浅浮彫に胡服を着た非漢民族の姿が表されていることを指摘し、その特殊性に注意を喚起した。この石板は本来台座と2点の門闕（屋敷の塀と門の模型、双闕とも言う）と一組であったが、早くに中国から流出し欧米の博物館に分蔵された。当時このような石板は他に例がなく、スカグリアは浮彫の図像を唯一の手がかりとし、それが北齊において薩保という官職についていたソグド人の葬具であると推測した [Scaglia 1958]。薩保とは北朝隋唐政権が設置した官職で、ソグド人聚落と祆教徒の管理を委ねていたことが知られている<sup>3)</sup>。スカグリアの研究により、この石板の重要性が認識されるようになったが、出土状況がほとんど不明であるために、同葬具の検討は1994年まで行われなかった [Marshak 1994]。

1992年にアメリカの古美術市場に非漢民族を表した11枚の石板と双闕が現れ、後に滋賀県のMiho Museumが所蔵するところとなった。A. ジュリアノとJ. ラーナーは、浮彫に表された人物の容貌や服装、儀式の分析から本葬具とソグド人との関連を指摘した [Lerner 1995; Juliano/Lerner 1997a, b]。長い間一例しか知られていなかった安陽出土葬具の類例として注目を集めたが、一方で浮彫に表された図像があまりに奇抜なために贋作ではないかと疑う研究者もいた。また同じ年に甘肅省天水市で出土した葬具が発表され、石板に西方の風俗が表されていることが報告された [『考古』1992/1: 46-54]。しかし墓誌が判読不能で墓主が知られず、また浮彫の図案が中国風であったためソグド人の葬具として考察されることはなかった [バンブリング 1995]。

### 2 虞弘墓・安伽墓の発見

はじめに述べたように、1999年に太原で、翌年西安で相次いでソグド人墓が発掘され、浮彫と彩色をほどこした石製葬具が出土した [『考古与文物』2000/6: 28-35; 『文物』2001/1: 4-25, 27-52]。太原の墓主虞弘（592年没）は字（莫藩）から、西安の墓主安伽（579年没）は姓（安）から、ソグド人であることが知られる（後述）。さらに墓誌は虞弘と安伽が、生前北周においてそれぞれ薩保府の官吏と薩保の職に就いていたことを伝える。前述の通りスカグリアは、安陽葬具がソグド人の薩保のものであると推定していた。ソグド人聚落を管轄する立場にあった虞弘と安伽の墓から、安陽葬具と類似した葬具が発見されたこ

---

3) 薩保（または薩宝、薩甫）はソグド語で「キャラバンリーダー」を意味する *sārtpāw* の音写形で [吉田 1988]、その職務は北朝・隋代においてはソグド人聚落の管理であったが、唐代になって祆教徒の管理に変化した [荒川 1998]。

とで、スカグリアの推定が実証された。また二基の墓で発掘された葬具の浮彫が、Miho Museum 所蔵の浮彫と類似していたため、後者の真贋問題には決着がついた。

### 3 虞弘墓・安伽墓の発見以降

ニューヨークの Shelby White and Leon Levy コレクションに入った2点の台座正面部分が、ソグド人の葬具の一部として2002年に発表された。本稿では、2点のうち Miho Museum 所蔵葬具の台座部分と推定される1点のみを紹介する [Carter 2002: fig. 2]。

2003年夏には西安の安伽墓の東2.2kmの地点で新たにソグド人の墓が発掘された。葬具の外側は浮彫で飾られ、正面上部には漢文とソグド文の銘文が刻まれていた。漢文銘文によれば、墓主は史姓（ソグド出身）で、北周の薩保をつとめ安伽と同じ579年に没した [『中国文物報』2003/9/26; 『文物天地』2003/11]<sup>4)</sup>。2004年4月には、Vahid Kooros コレクションの石製葬具がギメ美術館に展示され、その図像から中国に居住したソグド人の葬具であると考えられている [Musée Guimet 2004]。

## II 墓、石製葬具（石棺床囲屏・家型石槨）

### 1 墓と葬具の構造

天水・太原・西安の墓の構造は、同時代の漢人墓と同じである。西安の安伽墓と史君墓では、墓道、天井、過洞、甬道、墓室が発掘された。全長は各々35mと47.26m。

7点の葬具はその外形から ① 囲屏付き棺床、② 囲屏及び双闕付き棺床、③ 家型の石槨に分類される（①②は石棺床囲屏とも言う）。石棺床も石槨も北朝期に広く使用された葬具である。囲屏付き棺床は、当時の人々が使用していた床座と屏風を石材で再現したもので、囲屏の内側に屏風絵のように石刻が表される。屋敷の扉と門を模した双闕は、棺床の上の前方に左右対称に置かれる。石槨は、瓦葺きの切妻屋根の家屋の形をしていて、建物の前壁外側と、側壁及び後壁の内側または外側に図柄が刻まれる [長廣 1969: 145-55; 林 2003]。

河野道房によれば、北朝期の葬具に表された図像は「石刻線画」と呼ばれるが、文字通り線を刻んだものの他に、版木のように背景部分を図案より一段彫り下げたものも含む。画題には、漢の画像石の伝統を受け継ぐ昇仙図、漢代以降に流行する孝子伝や列女伝を描いた孝子図、墓主の日常生活を表す風俗図の3種類がある [曾布川・岡田 2000: 116-7]。ソグド人の葬具浮彫との関連が強い風俗図を表す葬具を挙げると、① 大同宋紹祖墓石槨 ② 大同智家堡石槨 ③ 久保惣記念美術館蔵石棺床囲屏 ④ ボストン美術館蔵寧懋石槨 ⑤ 山東省青州北

4) ソグド語銘文の解釈は吉田によって発表された（本稿注2参照）。それによればソグド文の内容は漢文とほぼ同じである。

齊石板 ⑥河南省沁陽県西向墓石棺床囲屏 ⑦天理参考館・サンフランシスコ美術館分蔵囲屏 ⑧洛陽古代芸術館蔵石棺床囲屏 ⑨洛陽出土囲屏 2組 ⑩C. T. Loo 旧蔵石棺床囲屏がある<sup>5)</sup>。

ソグド人の葬具の構造が、同時代の漢民族のものを模倣していることは言うまでもない。ソグド本土のソグド人は、ゾロアスター教の教義に従い、遺体を鳥や犬に食べさせ、残った骨を解体してオッサリと呼ばれる土器に納めていた。新疆ウイグル自治区では、ソグド人のオッサリと推定される納骨器が出土しているが<sup>6)</sup>、中国内地ではオッサリであると確実に言える資料は今のところ見つかっていない。

中国北部でソグド人の墓が発掘されたのは虞弘墓が初めてではなく、以前にも寧夏回族自治区固原で隋から初唐のソグド人一族の墓が発掘されている<sup>7)</sup>。しかし、墓の構造と壁画は同時代の漢人墓のものとなんら違いがなく、葬具や副葬品の中にもソグド人の墓であることを示す資料は含まれていない<sup>8)</sup>。これに対して本稿で取り上げる7点の葬具では、浮彫の技法及び内容において漢人墓葬具との違いは歴然であり、ソグド人独自の文化や風俗を映し出していると考えられる。これらの葬具の浮彫は、中国内地の聚落に集住したソグド人の宗教、生活の一端を知るための格好の資料でありその重要性ははかりしれない。

## 2 ソグド人石製葬具一覧

以下7点の葬具を「発見」順に挙げ、それぞれの資料の出土地・年代、葬具の形態・サイズ、葬具の装飾等を記す。

### ・河南省安陽出土石棺床囲屏

推定される出土地・年代：河南省彰徳府（安陽付近）・北齊

葬具：棺床正面（高60、長234<sup>9)</sup>、同側面2点（高20、長96）以上フリーア美術館蔵；双闕（高71.5、長74.0）ケルン東アジア美術館蔵；石板左（高50、長90）ギメ美術館蔵；同正面左（高64.7、長115.8）、同正面右（不明）以上ボストン美術館蔵；石板右壁は欠損、石灰岩

5) ①②『文物』2001/7（石刻ではなく壁画）③④曾布川・岡田2000：図62、63、319、図66 ⑤鄭2001 ⑥⑦⑧林2003 ⑨黄明蘭編著『洛陽北魏世俗石刻線画集』1987、北京、図87-89、図99 ⑩長廣1969：図39-42。

6) 影山1997。この論文でカラシャール出土とした納骨器はクチャで出土した可能性が高い。またクチャで出土したもう一点の納骨器もオッサリであると推定される。これについては別稿を準備している。

7) 羅豊『固原南郊隋唐墓地』1996；『唐史道洛墓』2000；Juliano/Lerner 2001b 所収の羅豊 Luo Feng 論文（239-45）と図版解説（nos. 80, 83-92）。

8) 副葬品の中にはササン朝のコインや装身具等、西方伝来のものが含まれるが、そのような遺物は漢人墓からも出土している。

9) 単位はcm。

葬具装飾：棺床正面・双闕の外側と開口部・パネル9枚に浮彫

図 版：Scaglia 1958；曾布川・岡田 2000：pl. 27

• Miho Museum・Shelby White and Leon Levy コレクション分蔵石棺床囲屏

推定される出土地・年代：北齊

葬 具：棺床正面（高 46.9，長 210.8/202.7）White and Levy コレクション；双闕（高約 50，長 53.3，56），石板 11 点（高約 60，長 25.4-53.4）以上 Miho Museum 蔵，白大理石

葬具装飾：棺床正面・双闕の外側・12枚のパネルに浮彫と彩色

図 版：Juliano/Lerner 1997a, 2001a: fig. 5

• 甘肅省天水市出土石棺床囲屏（天水市博物館蔵）

出土状況：1982年6月天水市郊外

墓 誌：判読不能，北周または隋（推定）

葬 具：全体（高 123，長 218，幅 115），石板 11 枚（高 87，長 30-46，厚 5），花崗岩

葬具装飾：棺床正面・11枚のパネルに浮彫と彩色

副 葬 品：未盗掘，石製伎楽俑 5 体，石枕，金の髪留め，銅鏡，陶器

図 版：『考古』1992/1；Juliano/Lerner 2001b: 304-13

• 山西省太原市出土虞弘墓石槨（山西省考古研究所蔵）

出土状況：1999年7月太原市南郊晋源区

墓誌（漢文）：虞弘の墓誌と妻の墓誌（後者は一部分を除いて未発表）。虞弘は魚国の出。

柔然・北齊・北周・隋に仕える。北周大象（579-80）末に并州・代州・介州の檢校薩保府の官吏になる [栄 2004: 12]。隋開皇 12（592）年埋葬。享年 59。妻は同 17（597）年に没し，翌年埋葬。魚国がどの地域にあったかは議論的になっているが，字「莫藩」はソグド人名 Mākhfarn「月神の栄光」の漢字音写であり，虞弘はソグド人だったに違いない [吉田・影山 2002]

葬 具：全体（長 295，幅 220，高 217），石板 9 枚（高 96，幅 47-102.5），石柱と柱礎 5 組，白大理石

葬具装飾：基壇正面と側面に浮彫と彩色，同背面に彩色画（浮彫なし），石槨前面外側・同側面及び背面の内側に浮彫と彩色，同側面及び背面の外側に彩色画（浮彫なし）

副 葬 品：被盗掘。俑，碗，灯台など 80 点以上

図 版：『文物』2001/1；張 2003b；栄・張 2004: 80-8；『太原隋代虞弘墓発掘報告』（近刊予定）

• 陝西省西安市出土安伽墓石棺床囲屏（陝西省考古研究所蔵）

出土状況：2000年5月西安市北郊未央区，漢長安城（＝北周の都城）の東 3.5 km

墓誌（漢文）：安伽は姑臧（武威）の出。北周時代に同州（陝西省大荔）薩保に任命された。北周大象元（579）年に死去し埋葬。享年 62。妻の記載無し

葬具：全体（長 228, 幅 103, 高 117), 甕扉側面（幅 93（左）, 102（右）, 高 68), 正面（幅 205, 高 68), 青石灰岩

葬具装飾：棺床正面・側面・12枚のパネル・墓門門額（高 66, 長 128）に浮彫・彩色・貼金

副葬品：未盗掘。ベルトの金具（青銅製, 鍍金）。第 3, 4 天井下部に壁画（武人像）

図版：陝西省考古研究所 2003

・ 陝西省西安市出土史君墓石槨（西安市文物保護考古所蔵）

出土状況：2003 年 6 月西安市北郊未央区, 漢長安城の東 5.7 km

墓誌（石槨の正面上部の石板に, 漢文とソグド文）：墓主は史姓（キシユ出身, 現シャフリサブズ）, 涼州薩保, 北周大象元（579）年没, 享年 86。妻は康姓（サマルカンド出身）, 大象 2 年合葬（以上漢文銘文による）

葬具：石槨（長 246, 幅 155, 高 158）, 石槨内部に石棺床（長 200, 幅 93, 高 20）

葬具装飾：基壇の四周・石槨四壁外側に浮彫。彩色と貼金の痕跡有り

副葬品：被盜掘。金の指輪, 金貨, 金の飾り。石槨内側に壁画の痕跡

図版：楊 2003, 2004; 榮・張 2004: 59-65, 細部の写真は未発表

・ Vahid Kooros コレクション石棺床甕扉

推定される出土地・年代：出土地不明, 6 世紀後半（類例からの推定）

葬具：棺床（長 233, 幅 115, 高 30）, 棺床の上の石板（厚 9）, 石板（高 90, 厚 5-6, 幅は記載無し）

葬具装飾：棺床四周・10 枚のパネルに浮彫と彩色。貼金の痕跡

副葬品：石製俑（獅子と男性各 2 点）

図版：Musée Guimet 2004

### III 葬具浮彫の内容とその解釈

#### 1 浮彫の主題

7 点の葬具の浮彫の主題をすべて述べることはできないので, 複数の葬具に共通して現れるものを挙げておきたい。邸宅で杯を傾ける男女, 葡萄の木の下で酒を飲む男たち（主人はリュトンを持つ）, 馬・象・駱駝に乗って狩りをする男たち, 馬に乗って出かける男女, 楽団とダンサー, 天幕とチュルク人, 鞍をつけた馬, 牛車, 口を布（パダーム）で覆った祭司（Miho 棺床・安伽門額・虞弘棺床・史君石槨正面の祭司は鳥の羽と足を持つ）。

#### 2 浮彫の内容解釈

虞弘墓・安伽墓の発見により, 以前から知られていた非漢民族を表す葬具はソグド人のも

のであることが確実にされた。資料の性質がはっきりし、同時にその数が増加したことにより、浮彫に表された内容の本格的な研究が開始された。2001年以降、虞弘・安伽墓の葬具浮彫と、それまでに知られていた三点の葬具浮彫の図像を併せて検討する作業が行われている<sup>10)</sup>。

・ 登場人物と儀式の比定

ジュリアノとラーナーは、後に Miho Museum が所蔵するところとなった石棺床囲屏の資料価値をいち早く認め、積極的に図像の検討を行ってきた [Juliano 2003; Juliano/Lerner 1997a, b, 2001a, b; Lerner 1995]。パネルの一枚にゾロアスター教の儀式(Āfrin-agān) が表されていること、そこには傷身行為をするチュルク人が表れていることに注目し、この葬具が中国に移住したソグド人のものと推定した。他のパネルには、エフタル人、漢人、鮮卑人が登場すること、またソグドで信仰されていた四臂のナナ女神が表されていることも認められた。

ペンジケントをはじめソグドの遺跡で出土した壁画の研究の第一人者である B. マルシャークは、サマルカンドの壁画の解釈を行った際に、安陽囲屏に表された図像についても検討し、両者にはゾロアスター教に由来する新年祭と先祖供養の場面が表されているとみなした [Marshak 1994: 12-6]。また彼に拠れば、虞弘葬具には馬に乗るミスラ神が、Miho 葬具にはオクサスの神ワフシュが馬の姿で登場する [Marshak 2001: 254; 2004: 35, 41]。

姜伯勤は 1999 年からソグド人葬具の図像に関する論文を精力的に発表している [姜 1999, 2001a, b, c, 2002, 2003a, b]。近著『中国袄教芸術史研究』には、同氏が発表したこれらの論文が再録されている他、個々の葬具の検討結果に基づき、ソグド人の葬具全体を考察する論考も加えられている。タイトルが示すとおり、著者の主な研究対象は中国に入ったゾロアスター教の図像にあり、浮彫の図像中に同教の神格や儀式を積極的に見出そうとしている。例えば、虞弘葬具には上述のミスラ神の他に、ウルスラグナ、アフラマズダー、アムシャ・スプンタ 6 柱のうちの 5 柱など、全部で 14 柱の神格が登場すると述べる [姜 2001b, 2002, 2004: 297]。

榮新江は、かつて編纂史料や出土文書の中から、北朝・隋唐時代の中国内地のソグド人の活動に関する情報を収集し、ソグド人の東方における活動をより具体的に示した [榮 1999]。ソグド人の葬具浮彫には中国のソグド人聚落内部の様子が反映されていると推定し、文献史料と当該浮彫をつきあわせて、聚落の形態をより一層明らかにしようと試みている [榮

10) 図像の他に墓誌や遺体の処理方法が研究対象となっている。安伽墓の甬道で見つかった人骨は分析の結果、50才を過ぎて死亡したコーカソイドの男性のものであることが判明し、安伽の遺骨であると断定された。虞弘墓で出土した人骨の分析も行われており、墓誌が伝える墓主の民族性に合致する結果が出ているという [陝西省考古研究所 2003: 92-102]。



2001b, 2004]。墓主の妻は漢人女性と同じ服装で表されているため、従来の研究では妻は漢人であるとみなされていた。しかし榮新江は墓誌資料を利用して7世紀に死亡したソグド人の婚姻形態を調査し、ほとんどの場合ソグド人の妻はソグドもしくは西域出身者であることを確認し、浮彫の女性が漢人ではないことを明らかにした。

史君葬具の浮彫はまだ十分に発表されていないが、右壁の図像は早くも楊軍凱によって検討され、ゾロアスター教徒が死後に渡ると信じていたチンワト橋を、墓主夫妻が渡っている場面であると解釈された [楊 2003]。

・ ローマ・ペルシア・ソグド・インド・中国の美術の影響

マルシャークは虞弘・天水葬具にワイン作りの様子が表されており、それらはローマのモチーフを借りていることを明らかにした [Marshak 2001: 256, 261]。張慶捷は虞弘葬具に認められるペルシアの図像の要素を指摘し [張 2003a], V. ラスポポヴァはMiho葬具とソグドの壁画を比較している [Raspopova 2004]。P. リブーはVahid Koorosコレクションの葬具にインド美術の影響を認めている [Musée Guimet 2004: 43-7]。ジュリアノとラーナーは早くに、Miho葬具に表される鞍をつけた馬と牛車が北朝期の墓葬美術に頻出するモチーフであることを指摘しているが [Juliano/Lerner 1997], これに対してP. リブーは鞍をつけた馬の背景には、中国とイランの両文化の要素を認める必要があると主張する [Riboud 2003]。筆者もソグド人葬具浮彫に北朝の墓葬美術と仏教美術の影響が認められることを指摘した [影山 2003: 123-8]。安陽・Miho・虞弘・安伽葬具には、墓主夫妻がダンスを観賞している場面があるが、このダンスは文献で知られる「胡旋舞」または「胡騰舞」を表すとされ、多くの研究者が注目している<sup>11)</sup> [Juliano/Lerner 2001a; 榮 2001a; 姜 2003b; Musée Guimet 2004: 37-42]。榮新江は虞弘葬具のダンサーと同じ姿勢のダンサーが、寧夏塩池県で発掘され700年頃に「六胡州」のソグド人が葬られたと推定される墓の石門と、ソグド出土のオッサリに表されていることに注目している。但しラーナーが指摘するように、ソグド人葬具の図像との比較のために引き合いに出されるソグドの壁画やオッサリのは大半は、葬具よりも遅く7世紀多くは8世紀のものであることに注意しなければならない<sup>12)</sup>。

モチーフの起源の他に描写方法も検討されている。ジュリアノはソグド人葬具の図像における空間の表現方法（遠近法）は中国絵画に見られる技法と同じであるとし、葬具を製作し

11) 2004年4月の北京での学会で（本稿注2参照）、張慶捷はこの問題について重要な見解を発表した。

12) この指摘は、かつてJuliano 2003とともにインターネット上に公開された論文（J. A. Lerner, What is Sogdian about the funerary furniture from Northern China? How the depiction of space can answer this question）の要約の中で発表されたが、その後彼女はそれを別の論文に差し替えた。しかし重要な批判であると思うので言及した。

た石工は漢人であるという結論を導いている [Juliano 2003]。ちなみにマルシャーク、ラスポーボヴァ、カーターも石工は漢人であると考えている。ラスポーボヴァは、ソグド本土では石刻が全く行われなかったことをその証拠として挙げている [Raspopova 2004: 58]。これに対して筆者は石工がソグド人であったと推定する。その根拠は、本葬具のソグド人の容貌は自然で、北朝期の壁画に描かれるソグド人のように戯画化されていないことである [影山 2003: 127-8]。

- ・「図像プログラム」の解明

パネルは長方形の枠によって区切られているが、個々の図像は一つのテーマによってつながっており、しかるべき順番で並べられているとの前提に立ち、そのテーマ、すなわち「図像プログラム」を解明する試みがなされている [姜 1999, 2001b, c, 2002, 2003a; 張 2001; 榮 2002; Rong 2003]。

- ・個々の葬具の図像が持つ独自性（時代差・地域差）

7点の葬具は図像においても技法においてもそれぞれ異なる特徴を持っている。マルシャークはソグド人の漢化が進むにつれて葬具の図像が中国風になると考え、安陽葬具が最も古く、Miho, 安伽, 虞弘, 天水の順で続くことを主張する [Marshak 2001: 263-4]。一方、ジュリアノとラーナーはこの違いを地方ごとに異なった流派が存在した結果であるとする [Juliano/Lerner 2001a]。同時期に同じ地域に葬られた安伽と史君の葬具は、今後この問題を解く鍵となるであろう。

## 結びにかえて

最後に上で挙げた青州出土の石板の線刻画について述べておきたい [鄭 2001; 姜 2003c]。この葬具の主人は鮮卑人の服装をしていてソグド人ではないが、複数の石板にソグド商人が表されている。鄭岩は本葬具にソグド人の葬具の図像が借用されていると述べている。また最近太原で発掘された北斉の墓壁画にも西域美術の影響が認められている [榮 2003; 羅 2003]。漢人の葬具を模倣して製作されたソグド人の葬具が、次第に漢人の墓葬美術に影響を与えるようになった可能性が以前から指摘されているが [Rawson 2001]、今後の研究が期待される。

虞弘墓と安伽墓の衝撃的な発見からわずか数年で、ソグド人葬具の研究はめざましい成果をあげている。これまでに指摘された他の地域の美術の影響が、いつどのようにして中国のソグド人に及んだのか、その際ソグドのソグド人は仲介者の役割を果たしたのか、といった問題へと今後議論は進んでいくであろう。造形資料に表された神像の比定は、ソグド本土の壁画研究の主要な課題でもあるが、ゾロアスター教文献に精通する研究者による慎重な分析が待たれる。

## 参 考 文 献

- 荒川正晴（1998）北朝隋・唐代における「薩宝」の性格をめぐって『東洋史苑』50-51, 164-86.
- 影山悦子（1997）東トルキスタン出土のオッサリ（ゾロアスター教徒の納骨器）について『オリエント』40（1）, 73-89.
- 影山悦子（2003）ソグドの壁画と東方に移住したソグド人の葬具，神戸市外国語大学審査学位論文（博士），未発表（『神戸外大論叢』54に要約を公表）.
- 曾布川寛・岡田健編（2000）『世界美術大全集』東洋編，3，三国・南北朝，小学館.
- 長廣敏雄（1969）『六朝時代美術の研究』美術出版社.
- バンプリング，ミッシェル（1995）甘肅省天水市発見の隋末唐初の日月屏風について『佛教藝術』222, 15-40.
- 吉田 豊（1988）ソグド語雑録（II）『オリエント』31（2）, 165-76.
- 吉田豊・影山悦子（2002）ソグド人，典籍を補う最新の出土資料から『しにか』2002（9）, 44-9.
- 林 聖智（2003）北朝時代における葬具の図像と機能：石棺床囲屏の墓主肖像と孝子伝図を例として『美術史』154, 207-26.
- 姜 伯勤 Jiang Boqin（1999）安陽北齊石棺床画像石の図像考察と入華粟特人の祆教美術『藝術史研究』1（姜2004：33-62に再録）.
- 姜 伯勤（2001a）図像証史：入華粟特人祆教芸術と中華礼制芸術的互動：Miho博物館所蔵北朝画像石研究『藝術史研究』3（姜2004：77-94に再録）.
- 姜 伯勤（2001b）隋檢校薩宝虞弘墓石椁画像石図像程序試探，巫2001（姜2004：121-38に再録）.
- 姜 伯勤（2001c）西安北周薩保安伽墓図像研究：北周安伽墓画像石図像所見伊蘭文化，突厥文化及其与中原文化的互動与交融『華学』5（姜2004：95-120に再録）.
- 姜 伯勤（2002）隋檢校薩宝虞弘墓祆教画像石図像的再探討『藝術史研究』4（姜2004：139-54に再録）.
- 姜 伯勤（2003a）天水隋石屏風墓胡人“酒如繩”祆祭画像石画像研究『敦煌研究』2003（1）（姜2004，155-70に再録）.
- 姜 伯勤（2003b）中国祆教画像石所見胡樂図像『九州学林』1（2）（姜2004：299-314に再録）.
- 姜 伯勤（2003c）青州傅家北齊画像石祆教図像的象徵意義：与粟特壁画的比較研究『藝術史研究』5（姜2004：63-76に再録）.
- 姜 伯勤（2004）『中国祆教芸術史研究』北京.
- 羅 世平 Luo Shiping（2003）太原北齊徐顯秀墓壁画中的胡化因素：北齊繪画研究札記（1）『藝術史研究』5, 223-41.
- 荣 新江 Rong Xinjiang（1999）北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落『国学研究』6（荣2001b：37-110に再録）.
- 荣 新江（2001a）粟特祆教美術東傳過程中的轉化：從粟特到中国，巫2001，51-72.
- 荣 新江（2001b）北朝隋唐粟特聚落的内部形態『中古中国与外来文明』北京，111-68.
- 荣 新江（2002）Miho 美術館粟特石棺屏風の図像及其組合『藝術史研究』4, 199-221.

- 榮 新江 (2003) 略談徐顯秀墓壁畫的菩薩聯珠紋『文物』2003 (10), 66-8.
- 榮 新江 (2004) 絲綢之路上粟特聚落的日常生活『Miho Museum 研究紀要』4, 1-10 (和訳: 11-5).
- 榮 新江・張 志清主編 (2004)『從撒馬爾干到長安: 粟特人在中國的文化遺跡』北京.
- 陝西省考古研究所 Shanxisheng Kaoguyanjiusuo 編著 (2003)『西安北周安伽墓』北京.
- 巫 鴻 Wu Hong 主編 (2001)『漢唐之間文化藝術的互動與交融』北京.
- 楊 軍凱 Yang Junkai (2003) 北周史君墓石槨東壁浮雕圖像初探『藝術史研究』5, 189-98.
- 楊 軍凱 (2004) 入華粟特聚落首領墓葬的新發現: 北周涼州薩保史君墓石槨圖像初探, 榮・張 2004, 17-26.
- 張 慶捷 Zhang Qingjie (2001) 太原隋代虞弘墓石槨浮雕的初步考察, 巫 2001, 3-28.
- 張 慶捷 (2003a) 虞弘墓石槨圖像中的波斯文化因素『伊朗學在中國論文集』3, 北京, 237-55.
- 張 慶捷 (2003b) 虞弘墓石槨圖像整理散記『藝術史研究』5, 199-222.
- 鄭 岩 Zheng Yan (2001) 青州北齊画像石與入華粟特人美術: 虞弘墓等考古新發現的啟示, 巫 2001, 73-109.
- Carter, M. L. (2002) Notes on two Chinese stone funerary bed bases with Zoroastrian symbolism. In: Ph. Huyse (ed.), *Iran, questions et connaissances*, Actes du IVE congrès européen des études iraniennes organisé par la Societas Iranologica Europaea, Paris, 6-10 septembre 1999, vol. 1 : La période ancienne, 263-87, Paris.
- Juliano, A. L. (2003) Chinese pictorial space at the cultural crossroads. In: M. Compareti, P. Raffetta & G. Scarcia (eds.), *Ērān ud Anērān*, Studies presented to Boris Ilich Marshak on the occasion of his 70 th birthday, Electronic version, (<http://www.transoxiana.com.ar/Eran/Articles/juliano.html>).
- Juliano, A. L. & J. A. Lerner (1997 a) Eleven panels and two gate towers with relief carving from a funerary couch. In: Miho Museum (ed.), *Catalogue of the Miho Museum collection, South wing*. Shigaraki, 247-57 (和訳: Miho Museum 編『Miho Museum 南館圖錄』1997, 247-57).
- Juliano, A. L. & J. A. Lerner (1997b) Cultural crossroads: Central Asian and Chinese entertainers on the Miho funerary couch. *Orientalism* October 1997, 72-8.
- Juliano, A. L. & J. A. Lerner (2001a) The Miho couch revisited in light of recent discoveries. *Orientalism* October 2001, 54-61.
- Juliano, A. L. & J. A. Lerner (2001b) *Monks and Merchants, Silk Road treasures from Northwest China*, New York.
- Lerner, J. (1995) Central Asians in sixth-century China: a Zoroastrian funerary rite. *Iranica Antiqua* 30, 179-90.
- Marshak, B. I. (1994) Le programme iconographique des peintures de la <<Salle des ambassadeurs>> à Afrasiab (Samarkand). *Arts Asiatiques* 49, 5-20.
- Marshak, B. I. (2001) La thématique sogdienne dans l'art de la Chine de la seconde moitié du

- VIe siècle. *Comptes Rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-lettres* 2001, 227 – 64.
- Marshak, B. I. (2004) The Miho couch and the other Sino-Sogdian works of art of the second half of the 6th century 『Miho Museum 研究紀要』 4, 16 – 31 (和訳：32 – 42).
- Musée Guimet (2004) *Lit de pierre, sommeil barbare*, Présentation, après restauration et remontage, d'une banquette funéraire ayant appartenu à un aristocrate d'Asie centrale venu s'établir en Chine au VIe siècle, Paris.
- Raspopova, V. I. (2004) Life and artistic conventions in the reliefs of the Miho couch 『Miho Museum 研究紀要』 4, 43 – 57 (和訳：58 – 68).
- Rawson, J. (2001) Creating universes : cultural exchange as seen in tombs in Northern China between the Han and Tang periods, 巫 2001, 113 – 52.
- Riboud, P. (2003) Le cheval sans cavalier dans l'art funéraire sogdien en Chine : à la recherche des sources d'un thème composite. *Arts Asiatique* 58, 148 – 61.
- Rong Xinjiang (2003) The illustrative sequence on An Jia's screen : a depiction of the daily life of a *Sabao*. *Orientalia* February, 2003, 32 – 5.
- Scaglia, G. (1958) Central Asians on a Northern Ch'i gate shrine. *Artibus Asiae* 21, 9 – 28.

(日本学術振興会・フランス高等研究院 (EPHE) /  
フランス国立科学研究センター (CNRS) 中国文明研究班)